

機関番号：30102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21830008

研究課題名（和文） 「文学翻訳の社会学」構築に向けて

研究課題名（英文） Toward the Establishment of 'Sociology of Literary Translation'

研究代表者

佐藤 美希 (SATO MIKI)

札幌大学・外国語学部英語学科・准教授

研究者番号：50507209

研究成果の概要（和文）：これまでテキスト論として論じられることが主であった外国文学の翻訳について、書評・出版動向・文学研究との関係といったテキスト外部のコンテキストとの関連に着目し、社会学や文化研究の観点から、文学の翻訳が受容する読者や研究者によってどのように捉えられているのかを考察した。その考察を通じて、翻訳についての考え方が変化している様相や、それが今後の外国文学受容に及ぼす影響を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Literary translation has been considered mainly as a subject of textual analysis. This research, however, sheds light on the context of the translation such as translation reviews, situation of publishing circles and academe of literary studies. By adapting sociological and cultural approaches, the research discusses how Japanese readers and scholars have been receptive to literary translation and how they think translation should be done. It also discusses how receptors' thoughts about translation have been changing and how that change exerts an influence on the way people are receptive to translated literature in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	930,000	279,000	1,209,000
2010年度	790,000	237,000	1,027,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,720,000	516,000	2,236,000

研究分野：翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：翻訳研究、トランスレーション・スタディーズ、文化の社会学、外国文学受容、文学研究、翻訳文学

1. 研究開始当初の背景

（1）それまでに行ってきた英文学作品の翻訳の考察を通じて、従来は文学的あるいは言語学的な主題であった文学翻訳の分析が、翻

訳のコンテキストへの着目によって、それを取り囲む当該の文化・社会状況の把握につながる有効な手法になりうるという確信を得ていた。

(2) この考察をさらに深化させるために、社会分析の枠組みや社会学的視座・手法の必要性を痛感した。

以上の二点から、文化社会的アプローチを援用し、「文学翻訳の社会学」の確立を目指すという着想に至った。

2. 研究の目的

近年、「文化の社会学」によって文化事象を社会的なプロセスの中に位置づけるアプローチが確立しつつあり、また、欧米で発展している翻訳研究(Translation Studies)でも、翻訳と社会・文化の関係を強調するアプローチが特色となっている。しかし、日本の外国文学翻訳についてこうした社会学的考察はいまだ充分ではないため、本研究は翻訳の研究を社会文化的に広げることを目指す。特に、日本における“文学翻訳「場」”がどのように構成され機能しているのかを明らかにすることを試みるものである。これによって、従来は文学や言語学の内部でしか主題化されてこなかった文学の翻訳という主題を、社会学的に捉え直す契機としたい。

同時に、翻訳研究における社会学的アプローチの大半が欧米の翻訳状況を扱っている現状に対し、欧米とは大きく異なる日本という文脈からの研究成果を示すという目的も持つ。

3. 研究の方法

(1) 概念・方法論等、枠組みの整理

近年の翻訳研究で見られる社会学的アプローチや枠組みへの理解を図った。先行研究ではブルデューが提唱した概念の応用が顕著であるが、本研究では主として「場」の概

念を翻訳分析に応用する妥当性と可能性についての理解に焦点を当てるため、ブルデューの「場」についての著作と、翻訳研究分野での先行研究の精査を行った。

(2) 日本の翻訳状況の考察

翻訳テキスト分析に加えて、翻訳者のコメントや翻訳書評、社会・文化思潮を抽出できるような資料など、様々な言説分析に(1)の概念・枠組みによる分析を付加して以下の考察を行った。

① 日本の“文学翻訳「場」”の全体像把握の一端とするべく、これまでに考察した明治から昭和までの翻訳とそのコンテクストの関連について、一次資・史料と二次資料ともに再検討を行った。

② 現在の文学翻訳とそのコンテクストである出版の問題や研究制度・学会などとの関係を中心に、翻訳テキスト外の翻訳論や書評などの翻訳言説を分析した。

4. 研究成果

(1) 2009年度は、①翻訳研究(トランスレーション・スタディーズ)における社会学的アプローチに依拠する先行研究をまとめる作業、②このアプローチの前提となる社会学や文化論の基礎文献の精読、③日本の翻訳状況分析のための資料収集、④それに基づく予備研究、以上の三点について研究を進めた。

①および②については、近年欧米で出版が相次いでいる翻訳研究と社会学を関連づける著作や論文集の入手とその内容の検証、および翻訳研究の学会・シンポジウムへの参加を通じて、先行研究と現在の研究動向をまとめた。

最近の傾向として、翻訳と社会の関係性に着目する視点が以前より多く見られている

ことを確認したが、現在のところはまだ散発的な考察にとどまっている側面や、日本の状況には先行研究と同じような応用方法が適切ではない部分が認められた。欧米では外国文学の翻訳の地位が低いこともあってこれまであまり顧みられてこなかった翻訳者のあり方が、翻訳そのものを規定する役割として注目されはじめ、翻訳者を主題化するために「ハビトゥス」概念の応用が近年顕著に見られている。しかし、日本の場合は文学システムにおける翻訳文学の地位が高く、広く受け入れられているためその受容には多様な様相が含まれており、翻訳者のあり方（どのような立場から、どのように翻訳するのか）だけでは、日本で広く行われている翻訳文学受容の全体像は把握できないと考えられる。そのため、翻訳受容がどのように行われているかについては、その受容を生成する「場」の概念で把握する方が有効な議論になるという認識を深めた。

③に関しては、国立国会図書館所蔵の資料をはじめ、いくつかの貴重な資料を入手できた。

④については、予備研究として、近年の日本における文学翻訳状況の整理を行った。特に、新訳出版の流行が一つの顕著な例と考えられるため、新訳出版をめぐる現在の言説を過去の状況と比較するなど、翻訳のコンテキストの一つである書評や翻訳論の分析を行い、論文にまとめた。また、現在の翻訳をめぐるコンテキストと、従来までのコンテキストの比較分析も行い、現在のコンテキストが従来とは大きく異なる点を指摘した。文学翻訳をめぐるコンテキストにおいて、現在では参加者が多様化し、翻訳の方向性や翻訳規範の構築において参加者の参与や影響力の度

合いも大きくなっていることが指摘でき、過去のコンテキストからの変化を明確に読み取ることができた。

(2) 2010年度は、2009年度に行った考察に基づき、①明治以降と現在の文学翻訳のコンテキストおよびその変化に関して、「文学翻訳場」の概念を応用しての詳細な再検討、②翻訳研究（特に日本における研究動向）の中に、翻訳とその社会文化的コンテキストの関連を考察する研究をいかに位置づけるかに関する検証、以上の二点に主眼を置いて「文学翻訳の社会学」構築につなげるべく研究を進めた。

①については、以前にまとめていた明治期の英文学翻訳状況について、「場」の概念を用いて再検討した。それに加えて、2009年度に行った予備研究をさらに発展させる形で、現在の文学翻訳をめぐるコンテキストや、研究者、出版社、一般読者がどのように現在の文学翻訳場に参加しているのか、また明治期からいかに変化してきたのかに関する分析を深化させ、国内および国際学会での発表を行った。

明治から昭和までの場合は、文学翻訳の規範を形成する役割として、主として研究者（＝翻訳者）の影響力が大きかった、つまり文学翻訳場の圏域が比較的限定されていたのに対して、現在では出版マーケットの拡大などの影響を受けて、読者や出版社といった以前は大きな影響力を持っていなかったと考えられる参加者の重要性が増し、文学翻訳場が拡大している点を指摘した。

この分析については翻訳研究に特化した国際学会で発表を行ったため、専門的な助言やコメントを多くいただく機会となり、そうしたコメントを参考にして、海外の論集に投

稿するため現在2編の英語論文を執筆および投稿準備中である。

②に関しては、2009年度に行った翻訳研究(トランスレーション・スタディーズ)の研究傾向の推移と社会的なアプローチに依拠する研究動向の整理を踏まえ、さらにそれを日本での翻訳研究に接続する意義について検討した。①で行った翻訳受容を生成する「場」の参加者とその参加内容の多様性の具体的な分析を例示し、こうした新たな着眼点によって翻訳分析がテキスト論にとどまらない、社会・文化分析に接合できるツールであることをあらためて例証した。それに伴い、日本の文化の大きな一端を担ってきた翻訳文化がどのように生成されてきたかを理解する必要性を明確にした。

以上の研究から、さらなる研究課題も見つかっている。例えば、翻訳分析に社会的なアプローチを援用するに際して、国際学会での発表の際に、ブルデューだけではなくブルーノ・ラトゥールが提唱するネットワーク理論の有効性についても詳細な助言を得ることができたが、基礎的な枠組みの援用にまで発展させることができなかった。しかし、日本においてラトゥールの理論を人文系の研究対象に応用した例は多くはなく、その意味でもこの助言を元に研究を進めることは、今後の研究の広がりにつながる可能性がある。

また、具体的な事例研究についても、明治から現在までの翻訳文学受容においてはこの2年間に分析した以外にも多くの様々な考察すべき事例を目にしている。それらについての分析を付与して、さらに詳細な翻訳文化分析に繋げる必要性も認識している。

今回の研究によって日本の文学翻訳場の変遷を明らかにするという成果があったが、

上述したような新たな課題に接続しながら、文学翻訳をめぐる状況に関するさらに精緻な分析に繋げていく素地になったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 佐藤美希、「日本の文学翻訳研究への社会的アプローチ」『生存学センター報告』第15号「日本における翻訳学の行方」会議録報告(立命館大学)、2010、148-153

② 佐藤美希、「新訳をめぐる翻訳批評比較」『メディア・コミュニケーション研究』第57号、2009、1-20、査読有り

[学会発表] (計 4 件)

① 佐藤美希、「『英語青年』が描く明治31年以後の“英文学”」日本英文学会関東支部例会シンポジウム「日本における英文学受容」2011年1月8日、東京大学

② Sato, Miki, 'Deviation from or (Re-)Creation of the Translation Tradition in Japan?', 4th Asian Translation Tradition Conference, Dec.15, 2010, The Chinese University of Hong Kong, HK, 査読有り

③ 佐藤美希、「学問分野としての翻訳研究(トランスレーション・スタディーズ)と日本への展開の可能性」2010年度多文化関係学会北海道・東北地区研究会、2010年8月9日、札幌市、北星学園大学

④ Sato, Miki, 'A Case of a Sociological Approach to Literary Translation in Japan'

国際カンファレンス「日本における翻訳学の
行方 Translation Studies in the Japanese
Context」、2010年1月10日、京都市、立
命館大学、査読有り（ポスター発表）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 美希 (SATO MIKI)

札幌大学・外国語学部英語学科・准教授

研究者番号：50507209

(2) 研究分担者 特になし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 特になし

()

研究者番号：